

『太平記』(日本古典文学大系) 年表索引稿 (一)

谷 垣 伊 太 雄

本稿は、かつて、嘉部嘉隆氏(本学教授・阪本千秋氏(大阪府立大手前高校教諭)と『太平記』の輪読をしていた際に筆者が作成した『太平記年表』に修正・加筆したものである。

その後、山下宏明氏の校注によって新潮日本古典集成に収められた『太平記』(全五冊・昭和五十五年五月現在、第二冊―十五巻まで刊行)にも、史実との比較欄を含む詳細な「太平記年表」が付載されており、本稿を活字化する事に躊躇も感じたが、古典大系本の『太平記』の利用の便宜を考えて、印刷する事とした。

なお、本稿では、『太平記』の本筋から派生した記事の中に出て

くる年号(たとえば、巻十六「日本朝敵事」における「天平四年」△101頁▽など)とか、中国故事の中に出てくる年号などについては、省いた。また、史実とのズレ等は問題になる点であるが、煩雑さを避けるために、テキストとした日本古典文学大系の頭註などを記するにとどめた。この大系本は、第一冊に巻一―十二、第二冊に巻十三―二十五、第三冊に巻二十六―四十を収めているが、巻数によって頁数の見当がつくので、分冊の数字は付記しなかった。

本来なら、全巻をまとめて載せるべきであるが、紙幅の都合上、本稿では巻十六までとした。△注▽

巻	頁	年	月日	事
1	38	元亨元年	夏	大飢饉あり。その際、後醍醐帝は窮民を救済する。
	39	文保2年	8月3日	藤原禮子(西園寺実兼の娘)、後醍醐天皇の后妃となる。
	42	元亨2年	春	春頃から「中宮(禮子)懐妊ノ御祈」と称して、関東調伏の御祈りが行なわれた。

1 49 元徳元年 9月19日 卯刻、六波羅勢集結する(小串範行・山本時綱ら、土岐・多治見を討つ)。「正中の変」

		2										1			
85												49	元徳元年	9月19日	卯刻、六波羅勢集結する(小串範行・山本時綱ら、土岐・多治見を討つ)。「正中の変」
83												54		5月10日	東使(長崎泰光・南条宗直)上洛して、日野資朝・俊基を召し取る。
83	其年											54		同27日	東使、資朝・俊基を引きつれ、鎌倉に到着。
83												54		7月7日	乞巧奠の行事なし。後醍醐天皇、北条高時への御告文を吉田冬房に書かせる。
82	同年											58	元徳2年	2月4日	後醍醐天皇、万里小路藤房を召して、「来月八日東大寺興福寺行幸有ベシ」と仰せあり。
82	元弘元年											59		同月27日	後醍醐天皇、比叡山へ行幸。
82	嘉暦2年	春										61		5月11日	暁、円観上人・文観僧正・忠円僧正の三人、六波羅に召し捕らえられる。
74												64		6月24日	僧達、鎌倉に到着する。
69												63	同年	6月8日	東使、三人の僧を引きつれ、関東へ下向。
67												65	同	7月13日	三人の僧達の遠流地決定する。
65												64		7月11日	俊基、再び六波羅に召し捕らえられる。
64												63		7月26日	俊基、鎌倉に到着。
63												61		5月29日	「暮程」に牢から出された資朝、佐渡にて斬られる。
61												59		5月29日	「春ノ比、南都大乘院禪師房ト六方の大衆ト、確執の事有テ合戦ニ及ブ」
59												58		春	「比叡山東塔ノ北谷ヨリ兵火出来テ」諸堂焼失する。
58												54		7月3日	大地震のため紀伊国千里浜の遠干潟が陸地になる。
54												54		同7日	「酉ノ刻ニ地震有テ、富士ノ絶頂崩ル、事數百丈」
54												53		8月22日	「東使兩人三千餘騎ニテ上洛スト聞ヘシカバ」近国の軍勢、京都に集まる。
53												49		8月24日	「夜ニ入テ、大塔宮ヨル潜ニ御使ヲ以テ主上ヘ」意見を具申。後醍醐天皇、内裏を出る。
49												49		(52日)	京都を脱出した後醍醐天皇が「古津石地藏ヲ過サセ玉ヒケル時、夜ハ早若々ト明ニケリ」

42	元亨2年	春	春頃から「中宮(禊子)懐妊ノ御祈」と称して、関東調伏の御祈りが行なわれた。
39	文保2年	8月3日	藤原禊子(西園寺実兼の娘)、後醍醐天皇の后妃となる。

3		2	
106	9日晦日	夜、陶山・小見山、笠置に先懸け。	翌日26日
105	同晦日	関東勢の前陣、美濃・尾張に到着。後陣はまだ高志・二村峠。(29日が晦日、天正本「23日」)。	後醍醐天皇、「潜幸ノ儀式ヲ引ツクロヒ」笠置の石室へ臨幸。
105	9月20日	関東(北条)勢二十万七千六百余騎、鎌倉を出発。	同27日
103	同13日	晩景、備後国より早馬到着し、桜山四郎入道挙兵を報告。	(24日)
103	同11日	河内国よりの早馬、楠正成が天皇方として挙兵した、との報告を伝える。	(25日)
100	9月3日	卯刻、「明レバ九月三日ノ卯刻ニ、東西南北ノ寄手、相近テ時ヲ作ル」。	(25日)
100	9月2日	宇治に集結していた幕府勢、笠置に出発。	比叡山浄林房阿闍梨蒙誓から六波羅への使者「今夜ノ寅ノ刻ニ、主上山門ヲ御憑有テ臨幸成リタル」
100	(1日)	「昨日ノ合戦ニ、官軍打勝ヌ」(高橋の軍勢を笠置側が撃退したこと)。	「明日ハ六波羅へ被レ寄ベキ由評定アリ」と告げる。これにより六波羅勢、叡山に発向する。
99	(1日)	余騎で笠置へ攻め寄せる。	巳刻に後伏見上皇ら六条殿から六波羅北庁へ御幸。
99	9月1日	六波羅勢、宇治にて十万余騎が参集	夜半、妙法院(宗良親王)・大塔宮は、戸津浜から小舟で石山へ落ちる。
96	8月27日	後醍醐天皇、笠置寺へ臨幸し、本堂を皇居とする。(諸書により伝えが違うが8月27日が正しいか)	後醍醐天皇、笠置寺へ臨幸し、本堂を皇居とする。(諸書により伝えが違うが8月27日が正しいか)
92	29日		
91	昨日27日		
86	(25日)		
86	(25日)		
85	(24日)		
85	同27日		
85	翌日26日		

				6
182	去年	9月	笠置城破れ、先帝隱岐配流の後、後醍醐天皇方の旧臣・宮女は悲嘆にくれる。	
185	元弘2年	3月5日	北条時益・仲時、両六波羅探題に任命され上洛する。(天正本「元徳2年2月5日」)。	
185	同	4月3日	楠正成、紀伊国湯浅の城を攻める。(去年赤坂ノ城ニテ、焼死タル眞似ヲシテ)落ちていた。	
186		5月17日	正成、住吉・天王寺辺へ進出し渡部橋の南に陣取る。	
186		同 20日	隅田・高橋が両六波羅の軍奉行として五千余騎で京都を出発し天王寺に向かう。	
186		5月21日	正成、渡部の橋の合戦で、隅田・高橋を撃破する。	
189		7月19日	午刻、宇都宮治部大輔、両六波羅の命令により京都を出発し、天王寺に向かう。	
192		7月27日	夜半、一応の勝利を得た宇都宮は天王寺を引き上洛する。	
192		翌日	早旦、宇都宮と入れ替って、楠正成、天王寺に戻る。	
193	元弘2年	8月3日	楠正成、住吉神社に参詣。	
193		翌日	正成、天王寺に参詣し、「未来記」を披見する。	
194	明年	春	「明年ノ春ノ比此君(後醍醐天皇) 隠岐國ヨリ還幸成テ、再ビ帝位ニ即カセ可レ給事ナルベシ」(正成の「未来記」についての解釈)。	
197		9月20日	関東勢三十万七千五百余騎、鎌倉を出発。	
197		10月8日	関東勢の先陣、京都に到着。	
197	元弘3年	正月晦日	諸国の軍勢八十万騎、吉野・赤坂・金剛山へ向かう。(天正本「28日」。「閏2月」とする本は誤)。	
199	同	2月2日	「同2月二日午刻ニ、可有矢合ニ」(赤坂城へ向かった大将阿曾弾正少弼の布告)。	
204	正慶2年	2月2日	「武藏國ノ住人人見四郎恩阿、生年七十三、正慶二年二月二日、赤坂ノ城へ向テ、武恩ヲ報ゼン為ニ討死仕畢ヌ」(人見四郎が天王寺石の鳥居の左の柱に歌とともに書き残していた一文)。	
204		2月2日	「相摸國ノ住人本間九郎資貞嫡子、源内兵衛資忠生年十八歳、正慶二年仲春二日、父が死骸ヲ枕ニシテ、	

9						8												
289	288	283	282	281	281	273	271	268	268	262	261	261	260	257	257	256	254	254
	元弘三年				元弘三年													
卯月16日	3月	4月27日	(17日)	4月16日	3月27日	4月9日	(4月8日)	4月8日	4月2日	(4月3日)	去月12日	4月3日	去月12日	28日	27日	3月26日	3月15日	去12日
「中ノ申ナリシカドモ、日吉ノ祭礼モ」なし。	「去ル三月ヨリ(六波羅の)北方ノ館ヲ御所ニシツラヒ」(文義が通じない)。	「四月二十七日ニハ八幡・山崎ノ合戦ト、兼テヨリ被レ定ケレバ」	「足利殿ハ京着ノ翌日ヨリ、伯耆ノ船上ヘ潛ニ使ヲ進セテ、御方ニ可レ参由ヲ被レ申タリ」	足利高氏ら、京都に到着。	足利高氏ら、鎌倉を出発する。	翌日四月九日、京中の軍勢、谷堂に火を放つ。	「第六ノ若宮」上將軍として篠村を出発。	卯刻、官軍六波羅へ攻め寄せせる。「今日ハ佛生日」なのに合戦を始めた、と「人々舌ヲ翻セリ。」	夕方、「夕陽ニ及テ軍散シケレバ」千種忠頭が本陣に帰つて味方の死傷者を調べると七千人を越えた。	「其日ノ巳刻ヨリ、三方ナガラ同時ニ軍始テ、入替々々責戦フ」	「去月十二日ノ合戦モ、其方ヨリ勝タリシカバ吉例也」(22日)とする本は誤。	卯刻、官軍七千余騎を二手に分け、京都へ攻め寄せせる。	「去月十二日赤松合戦無レ利シテ引退シ後……」	山門では、大官前で着到を付けると十万六千余騎となった。	「山門已ニ來廿八日六波羅ヘ可レ寄」ト決定。	大塔宮の呼びかけに応え、山門の衆徒、大講堂の庭に会合する。	卯刻、六波羅勢、山崎へ向う。	両六波羅の下知「去十二日ノ合戦ノ體ヲ見ルニ……」

		10
328	(16日)	「敵(鎌倉勢)ハ前日(15日)数箇度ノ戦ニ人馬皆疲タリ」。
328	5月16日	「明レバ五月十六ノ寅刻ニ」三浦の大軍、分陪河原へ押寄せる。
328	(15日)	御合戦ニハ義勝荒手ニテ候ヘバ、一方ノ前ヲ承テ、敵ヲ一當々テ見候ハン」。(三浦義勝のことば)
327	15日	「晩景ニ」、援軍の三浦義勝勢六千余騎、義貞の陣へ馳参る。
327	(15日)	「其日」引退いた新田勢を追いかけ攻撃していたら、「義貞爰ニテ被レ討給フベカリシヨ」平家(北条方)は追わず「大様ニ憑デ時ヲ移ス」。
326	15日	「夜半許ニ」、高時が重ねて派遣した鎌倉からの十万余騎が分陪河原に到着。
326	(15日)	「十五日ノ夜未レ明ニ」義貞は敵に新しい軍勢が加わったとは知らず、分陪河原に押し寄せる。
326	(?)	「連日數度ノ戦」により、平家は分陪河原に引退き、源氏は久米河に陣取る。
326	(?)	「夜既ニ明ヌレバ」源氏は馬を進め、平家は待ちうけ、対峙した。
325	(12日)	「夜既ニ明ヌレバ」源氏は馬を進め、平家は待ちうけ、対峙した。
325	(11日)	「日已ニ暮ケレバ、人馬共ニ疲タリ。軍ハ明日ト約諾シテ」義貞は入間河に陣取る。
324	同 11日	「路次ニ兩日逗留有テ、同十一ノ辰刻ニ」金沢らの大軍は武蔵国小手差原に到着。
324	(10日)	「翌日ノ巳刻ニ」金沢貞将・桜田貞国、大軍を率いて鎌倉を出発。
324	同 9日	鎌倉で軍評定あり。(新田殿退治ノ沙汰許也)
323	(9日)	「其日ノ暮程ニ」近国の軍勢参集し、二十万七千余騎となる。
323	同 9日	義貞ら武蔵国へ移動、千寿王らも馳せ着く。
323		ノ程ニゾ参着候ハンズラン」と大井田遠江守は申し述べた。
323	5日	「去五日」天狗山伏一人が越後の国中を触れまわったので来援した旨、又、「境を隔タル者ハ、皆明日

		10	
332		(17日)	鎌倉中の人々は「昨日、一昨日マデ」(P311)は、負戦の報を聞いてもさほど気にしていなかったが、大手の大将四郎左近太夫入道(高時の弟)が「昨日(16日) 晩景ニ」鎌倉に引返した事などを聞き「周章シケル」。
332		5月18日	卯刻、新田勢は勢は「五十余箇所に火ヲ懸テ」鎌倉に押し寄せる。
333		(18日)	「同日ノ巳刻ヨリ合戦始テ、終日終夜責戦フ」。
333		(18日)	赤橋盛時「今朝ハ洲崎へ被向タリケルガ、此陣ノ軍剛シテ一日一夜ノ其間ニ、六十五度マデ切合タリ。」
334		18日	「十八日ノ晩程ニ」洲崎の赤橋勢の多数の自害等により、「義貞ノ官軍ハ山内マデ」進入した。
335		5月19日	本間山城左衛門は「己五月十九日ノ早旦ニ極楽寺ノ切通ノ軍破レテ敵(義貞勢が) 攻入ナンドヘシカバ」
336			「是ヲ最後ト」極楽寺坂へ向かう。
336		21日	新田義貞は、大館宗氏が本間に討たれて引き退いたと聞き、「二十一日ノ夜半許ニ」極楽寺坂へ向かう。
336		(21日)	「明行月ニ」義貞が敵陣を見ると、北からも南からも攻め難く見えた。
336		(21日)	「其夜ノ月ノ入方ニ」稲村崎、干上る。
338		(21日)	鎌倉(北条)方から、官軍(義貞)方への降人も多く出たため「凡源平威ヲ振ヒ、互ニ天下ヲ争ハン事モ、今日ヲ限リトゾ見ヘタリケル」。
341		21日	「二十一日ノ合戦ニ」奮戦した長崎為基は「其後ハ、生死ヲ不レ知成ニケリ」。
342		(21日)	大仏貞直ハ「昨日マデニ二萬餘騎ニテ、極楽寺ノ切通ヲ支テ防鬪ヒ給ヒケルガ、今朝(21日)ノ濱ノ合戦ニ、三百餘騎に討成レ、大軍の中に駆け入り討死する。
347		(21日)	安東聖秀(北条方)が自分の館に戻ってみると、「今朝巳刻ニ、宿所ハ早焼テ其跡モナシ」。
352	建武元年	春	「其後盛高此若公(北条時行)ヲ具足シテ、信濃へ落下リ、諏訪ノ祝ヲ憑テ有シガ、建武元年ノ春ノ比、暫關東ヲ劫略シテ、天下ノ大軍ヲ起シ、中前代ノ大将ニ、相換二郎ト云ハ是ナリ」(2年7月が正)。

328		5月16日	「明レバ五月十六ノ寅刻ニ」三浦の大軍、分倍河原へ押寄せる。
328		(16日)	「敵(鎌倉勢)ハ前日(15日) 数箇度ノ戦ニ人馬皆疲タリ」。

13														12					
21	18	428	428	425	417		417	411	398	397	397	396	394	394		392	392	392	392
元弘				去年	元弘3年		建武	元弘3年	翌年							同年	2年		元弘
	3月11日	5月3日	3月5日	5月	7月			春	1月12日	11月3日	8月2日	8月3日	同 23日	6月17日		同 13日	6月3日	夏	
	「元弘ノ末」万里小路宣房は、春日社の靈夢通りに従一位となる。	八幡の行幸（万里小路藤房は諫言が許容されぬため、行幸に供奉したあと行方をくらます）。	護良親王を「直義朝臣ノ方へ被レ渡」鎌倉へ下シ奉テ、二階堂ノ谷ニ土籠ヲ塗テソ置進セケル」。	馬場殿に幽閉された護良親王、二条道平宛に無罪を訴える消息を送る。しかし、奏聞されず。	大塔宮と足利尊氏との不和の根元は、「去年ノ五月ニ官軍六波羅ヲ貫落シタリシ」時に始まる。	「元弘三年七月ニ改元有テ建武ニ被レ移」。(正しくは「元弘4年正月29日」)。	の)トゾ聞ヘシ」。	「建武ノ亂ニ圓心(赤松)俄ニ心替シテ、朝敵ト成シモ、此恨(佐用庄)しか貰えなかつた恩賞の不公平へ	「翌年(建武元年)正月十二日、諸卿議奏シテ」大内裏造宮を奏上。	「元弘三年(元弘4年)建武元年が正しい」春ノ比、諸国で反逆の乱軍蜂起。間もなく平定される。	「去七月ノ初ヨリ中宮(禮子)御心煩ハセ給ケルガ、八月二日隠サセ給フ」。(10月6日が正しい)。	「同八月三日ヨリ可有軍勢恩賞沙汰」トテ、洞院実世を上卿として恩賞の処置あり。	大塔宮は「八幡ニ七日御逗留有テ、同二十三日御入洛アリ」。	大塔宮、志貴を出発。	り。	大塔宮は「同十三日可有御入洛被定」ていたが、何故か延引。「合戦ノ御用意アリ」との風評あり。	「同年ノ六月三日、大塔宮志貴ノ毘沙門堂ニ御座有」と聞き、方々より兵が馳せ参す。	「其二年(正しくは3年)ノ夏比、天下一時ニ評定シ、公家ニ統の政治となる。	「先帝重祚之後、正慶ノ年號ハ廢帝ノ改元ナレバトテ被レ棄之、本ノ元弘ニ歸サル」

14														13				
48	元弘																	
47		(?)																
47	建武2年	10月																
46		5月22日																
46		6月3日																
45		同月7日																
45	(元弘3年)	5月8日																
45	建武2年	10月																
43	(建武2年)	(10月)																
42		6月3日																
42	元弘																	
38		同 8日																
38		8月7日																
38		8月3日																
32		(23日?)																

鎌倉を落給ケリ。

直義の命令により、淵辺伊賀守は「半年許籠ノ中ニ」幽閉されていた護良親王の「御頸ヲ搔落ス」。

北条時行の命令で、名越式部大輔を大将として三万余騎が「八月三日鎌倉ヲ立ントシケル夜」大風のため、軍兵五百余人死亡。

名越の軍勢「前陣已ニ遠江佐夜ノ中山を越ケリ」。

「同八日ノ卯刻ニ」足利尊氏の勢五万余騎は名越の陣へ押し寄せる。(尊氏方の勝利)。

「去ヌル元弘ノ初」義貞、鎌倉を攻め滅ぼす。

義貞の鎌倉攻めの後、千寿王(義詮)は、下野国より鎌倉に戻った。(恩賞に預かろうとした兵は義貞より千寿王の元に参集。これ以来、新田・足利両家は不和となる)。

時行を討滅した尊氏に「隠謀ノ企アル由叡聞ニ達シケレバ、主上逆鱗有テ」「御憤有ケル」ゆえ、事情究明のため懸鎮上人が「奉レ勅關東へ下ラント欲給ケル其日」、尊氏よりの奏状が届く。

尊氏よりの奏状の日付「建武二年十月日」。

義貞からも奏状あり。その文中「義貞賜朝敵追罰倫旨ニ初起ニ于上野者五月八日也」。

「尊氏付言軍殿ニ攻ニ波羅ニ同月七日也」。(義貞の奏状文中)

「尊氏長男義詮才率ニ百餘騎ニ還ニ入鎌倉者、六月三日也」。(義貞の奏状文中)

「義貞隨ニ百萬騎士ニ、立亡凶黨者、五月二十二日也」。(義貞の奏状文中)

義貞よりの奏状の日付「建武二年十月(11月が正しいか)日」。

「諸卿皆此儀(義貞の奏状により尊氏に罪ありとする)ニ被レ同、其日議定は終ニケリ」。

「元弘ノ兵亂ノ後、天下ニ一統ニ歸シ」たものの、「四海未ダ安堵ノ思モ不レ成處ニ、此事(尊氏追討の出兵)出来テ諸國ノ軍勢共催促ニ隨ヘバ」「安キ意モ無リケリ」。

		14
69	去月26日	「去月二十六日、當國ノ住人佐々木三郎左衛門尉信胤・同田井新左衛門尉信高等、細川卿律師定禪ガ語
69	同 11日	備前ノ児嶋高德より京都へ早馬ノ報告。
68	去月26日	高松頼重ノ報告。「去月二十六日」細川定禪ガ讃岐にて挙兵した由。
68	12月10日	讃岐ノ高松頼重より早馬ガ京都へ。
68	(?)	義貞「其日天龍川ヲ立テテコソ、尾張國マデハ引カレケレ」。
66	12月14日	竹下・箱根ノ合戦で敗れた義貞勢、「十二月十四日ノ暮程ニ」天龍川ノ東ノ宿に着く。
59	(12日)	「同日午刻ニ」合戦始まる。
59	12日	「明レバ十二日辰刻ニ」義貞勢、手分けして竹下・箱根へ向かう。
58	11日	足利高経ら「十一日マダ宵ニ竹下へ馳向フ」。
58	12月11日	「同十二月十一日兩陣ノ手分有テ」直義は箱根へ、尊氏は竹下へと決定。
57	11月23日	尊氏ノ出家ノ意志を翻すため、直義ガ書かせた謀書ノ日付。(3日が正しいか)。
55	(5日)	「夜已ニ深ニケレバ」義貞方より、敵陣に「雨ノ降如ク込矢ヲ射タリケル」。
55	(5日)	新田対足利ノ合戦。「午刻ノ始ヨリ、西ノ下マデ、十七度マデゾ戦タル」。
55	12月5日	「同十二月五日」新田義貞勢八万余騎、手越河原に出陣。
54	(25日)	「日已ニ暮ケレバ」直義勢、鷺坂に退く。
53	11月25日	卯刻、新田義貞・脇屋義助ら六万余騎、矢矧河に押し寄せる。(26日とする本あり)。
52	同 24日	直義勢、三河矢矧ノ東宿に到着。(27日・25日とする本あり)。
52	11月20日	直義、二十万七千余騎で鎌倉を出発。(23日とする本あり)。
49	同日	「同日ノ午刻ニ」新田義貞京都を出発。
48	11月8日	「十一月八日(19日が正しい)」新田義貞、尊氏討伐ノ宣旨を受ける。

48	元弘	「元弘ノ兵亂ノ後、天下ニ統一統ニ歸シ」たものの、「四海未ダ安堵ノ思モ不レ成處ニ、此事(尊氏追討)ノ出
		兵 出來テ諸國ノ軍勢共催促ニ隨ヘバ」「安キ意モ無リケリ」。

		14
74	正月7日	將軍(尊氏)八十万騎で「近江國伊岐洲ノ社」にたてこもつた山法師を攻略。
72	正月7日	義貞、内裏より退出して官軍の配置を決める。
72	(建武3年)	「改年立歸レ共、内裏ニハ朝拜モナシ」。
72	(?)	引他は乗替の馬に次々と乗替えて「日ヲ經テ尾張國ニ下著」。
71	(19日)	「其日ノ午刻ニ」近江國愛智川の宿に着いたところ、引他の乗る龍馬が病死する。
71	12月19日	「四夷八蛮起リ合テ、急ヲ告ル事隙ナカケレバ」尾張國にいる新田義貞を上洛させるため、勅使として引他九郎が派遣される。「十二月十九日の辰刻ニ」京都を出発。
71	今日12日	「今月十二日(2日か)彼逆徒等」、国司らの立籠る石動山へ押し寄せ、寺院を全焼させた。(衆徒の報告)。
70	去月27日	「去月二十七日越中の守護」ら「將軍ノ御教書ヲ以テ、兩國ノ勢ヲ集メ、叛逆ヲ企ル」(衆徒の報告)。
70	(12日)	「其日ノ酉刻ニ」能登國石動山の衆徒からも使者による報告あり。
70	12月19日	「去十二月十九日(参考本は12月9日かとする。11月19日かとも考えられ、史実としては12月29日のことか)ノ夜」久下時重ら丹波で挙兵(確井の報告)。
70	(12月12日)	「又翌日(12月12日のことか。史実としては建武3年正月12日とすべきか)ノ午刻ニ」丹波の確井盛景より早馬の報告。
70	(28日)	「其夜」熊山城に引き籠っていた官軍方の内藤弥二郎が、佐々木方に内通したため、高德らも敗退。
69	(27日)	「其翌日」佐々木らの勢、三千余騎となる。(児島の報告)。
69	(28日)	「同二十八日」佐々木らの勢、福山に押し寄せる。(児島の報告)。
69	(28日)	「其夜」熊山城に引き籠っていた官軍方の内藤弥二郎が、佐々木方に内通したため、高德らも敗退。
69		「児島の報告」。
69		イヲ得テ」挙兵した。(児島の報告)。

		15	
107		27日	「兎ニ角ニ延引シテ、今度ノ合戦ハ、廿七日ニゾ被 _レ 定ケル」。
107		(21日)	「官軍彌勢ヒヲ得テ翌日ニモ頓テ京都ヘ寄ント議シケル」。
107	(建武3年)	正月20日	大智院宮 _ニ 二万余騎、「正月廿日ノ晩景ニ東坂本ニゾ著ニケル」。
106	(建武2年)	12月	「去年(建武2年)十二月(11月が正しい)ニ、一宮關東ニ御下有シ」。
106		正月27日	「正月二十七日合戦事」。
101	建武2年	正月16日	「建武二年正月十六日合戦事」(13日・27日の記事も混同している)。
94		(?)	「夜既ニ明方ニ成シカバ」頭家・義貞等、三井寺攻めに出發。
94		(?)	勢ヲ被 _レ 添候へ」。
94		(?)	細川定禪より京都(尊氏)への報告。「東國ノ大勢坂本ニ著テ、明日(15日?)可 _レ 寄由其間へ候。急御待明ス」。
94		(?)	舟七百餘騎ニ取乗テ、澳ニ浮テ明ルヲ待」。山門の大衆ニ万余人は「如意越ヲ搦手ニ廻リ」。「嗚ヲ静メテ」。
94		(?)	千葉勢、「マダ宵ヨリ千餘騎ニテ志賀ノ里ニ陣取ル」。
94		(?)	大館 _ニ 六千余騎で「夜半ニ坂本ヲ立テ、唐崎ノ濱ニ陣ヲ取ル。戸津・比叡辻・和爾・堅田ノ者共ハ、小」。
93		(13日)	北畠頭家は、「今夜ノ中ニ志賀・唐崎ノ邊迄打寄テ、未明ニ三井寺へ押寄セ」る事を提案。
93		(12日)	「翌日」大館はこの事を坂本へ報告。天皇等大いに喜ぶ。
93		正月12日	北畠の奥州勢、近江愛智河の宿に到着。
92	(建武2年)	11月	「去年十一月」、義貞の関東下向の際、奥州の北畠頭家に「合圖ノ時ヲタガヘズ可 _三 攻合ニ由綸旨ヲ被 _レ 下」
			ていた。
			ニ七箇度也」。

E1	B1	15	
114		(5日)	十万余騎は、「其日」撰津国芥河に到着。(尊氏方も派兵)。
114		2月5日	頭家・義貞は、十万余騎で京都を出発。
113		(2日)	「此時」尊氏は、光厳上皇の院宣をもらうために薬師丸を京都へ送る。
113		2月2日	兵庫湊河に落集まった勢より連絡受けて、「二月二日將軍會地ヲ立テ」、撰津国に赴く。
113		(29日)	「將軍(尊氏)ハ其日丹波ノ篠村ヲ通り、會地」へ敗走。
112		29日	官軍の「諸大將ハ皆一手ニ成テ、二十九日ノ卯刻ニ、二條河原へ押寄テ」「時ヲソ揚タリケル」。
112		(28日)	「官軍宵ヨリ西坂ヲ、リ下テ」、八瀬等に陣取る。
112		(28日)	「同日ノ夜半許ニ、楠判官下部共ニ焼松ヲ二三千燃シ連サセテ、小原・鞍馬ノ方ヘソ下シケル」。
111		(27日)	楠木正成が仕立てた僧達は、「昨日ノ合戦ニ」新田義貞・北畠顯家・楠木正成らが「被レ討サセ給ヒ候程ニ、孝養ノ爲ニ其尸骸ヲ求候也」と語る。
111	源義朝	(28日)	「楠判官山門へ歸テ、翌ノ朝律僧ヲ二三十人作り立テ京へ下シ、此彼ノ戰場ニシテ、尸骸ヲソ求サセケル」。
111	源義朝	(29日)	「一日馬ノ足ヲ休メ、明後日ノ程ニ寄セテ、今一アテ手痛ク戦フ程ナラバ、ナドカ敵ヲ十里・二十里ガ外マデ追靡ケデハ候ベキ」(正成の提案)。
111		(27日)	「今日御合戦、不慮ニ八方ノ衆ヲ傾クト申セ共サシテ被レ討タル敵モ候ハズ」(楠木正成の発言)。
110		(27日)	「今日ハ引返サセ給ヒ候テ、一日馬ノ足ヲ休メ」(正成の提案)。
110		(27日)	「角テ(官軍が足利勢を破り、尊氏は都を落ちた)日已ニ暮ケレバ」。
107		(27日)	「機早ナル若大衆共」は「マダ卯刻ノ始ニ神樂岡ヘソ寄タリケル」。
107		(27日)	「合戦ハ明日(27日)辰刻ト被レ定ケル」。
107		(27日)	「既其日ニ成ヌレバ、人馬ヲ休ム爲ニ、宵ヨリ」楠木ら三千余騎で下松に陣取る。

